



Tile Side Story.

4

株式会社ダニエル代表取締役社長 | 咲寿義輝

商店街に憩いを創出した “元町ブルー”パークレット

ものづくりのストーリーを、多治見から元町へ

1859(安政6)年の横浜港開港に端を発する横浜市元町ショッピングストリート。かつて外国人御用達の店が集まり発展し、1970~80年代に流行した「ハマトラ」の発祥地として知られ、今も洗練された雰囲気が漂う全長600メートルの商店街だ。

2020年、この商店街にタイル仕立てのベンチと植栽が一体となった滞留空間「元町パークレット」が設置された。咲寿さんは、プロジェクトを推進した商店街のまちづくり委員の一人だった。

「2015年頃、地域の皆さんに『商店街には何が必要ですか?』というアンケートを取

ってみると、『商店街は楽しいけど、座って落ち着ける場所がない』という回答が多かったですね。そこで持ち上がったのは、サンフランシスコ発祥のパークレットを造るというアイデア。これは車道の一部を転用して人のための空間を生み出す取り組みで、元町仕様のパークレットを作ろうとプロジェクトが動き始めました」

咲寿さんらまちづくり委員会がパークレットに求めたのは、質感があり、耐久性に優れ、色合いが劣化しないベンチ。話し合いを重ねるうちに、タイルを用いる案が浮上した。

「僕らハマツ子は、やっぱり“横浜ブルー”にこだわりを持っていて、商店街でも植栽のプランターや照明塔など随所にブルーを用いています。構造物にペンキを塗っただけでは殺風景で冷たい印象があり、温かみがあって、耐久性があり、みんなが楽しめる素材は何かと考え、タイルに行き着いたのです」

プロジェクトのメンバーは、多治見市を訪れ、タイルの製造工場を回り見学した。

「僕らには、200人以上の店主ほか関係者に、なぜタイルなのか、どうしてそれが優れているのか、しっかり説明する義務がありました。実際に作っている現場に伺い、色の調合や焼き方などを目の当たりにし、職人さんの苦労話などもお聞きし、ものづくりのストーリーに触れることができました」

当初は、商店街の中で反対する声もあったというパークレットプロジェクト。咲寿さんは、タイルづくりの現場で見た経験をもとに